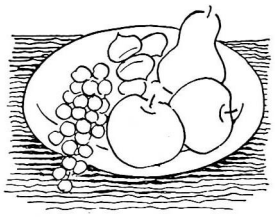
牧草と園藝

4



将来性ある 北海道りんごと 旭、紅玉の來歴について

星野博士談

本稿は北海道大学名誉教授、星野博士を訪問し、北海道りんごについてお伺いしその談話を記述したものである。

（文責在記者）

○北海道におけるりんご栽培の起原

北海道のりんごは開拓使により明治五年に移入せられ、開拓使が苗木を増植これを屯田兵または一般農家に配布したもので初期の北海道のりんごは主として屯田について発展したものである。府県より渡道し農業を経営するので、まず自給自足の見地と内地の家屋の周囲に各種果実の稔る情景をあこがれ好んで果樹を栽植したのである。

札幌市近郊は開拓使時代、りんごの奨励により北方の泥炭地を除いて市の三方は豊かに稔るりんご園で囲まれ、その風景、情緒は誠に素晴らしいものであつた。

滝川町の屯田は明治二十四、五年ごろでその頃滝川地区にりんごが栽植せられ、ついで江部乙村に屯田が入り、りんごもそれとともにこの地帯に入つたものである。

○北海道りんごの揺籃時代

これらのりんごが結実して来た頃腐爛病の発生があり特に岩見沢の北方に多く発生した。明治四十一年江部乙方面に腐爛病がひどく発生し、江部乙村長が大学に来て、指導をねがわれ（当時江部乙村のりんご産額二万円）星野博士と前北大学長伊藤博士が現地に趣きいろいろ指導講習を行つた。

一体北海道におけるりんご腐爛病の発生は岩見沢に発見されたのが嚆矢で、当時北方地帯に多く発生、被害を見た。当時は薬剤撒布などはなく、樹の衰弱により特に結実の進むに伴い腐爛病の多発を見たのである。

この現状より星野博士は江部乙方面のりんご栽培については悲観的であつたのであるが、大正の末期に江部乙りんごの声価が上り、また園芸会の講習会の折再び現地を見てその立派な回復発展ぶりにはむしろ驚きを感じたくらいで当時の栽培者の努力と熱意には深く敬意を表した次第である。

余市、平岸方面は初めから集団栽培しておつたためにその栽培並びに病害の防除には他地方に比べ真剣に協力して努めたので被害も大したことなく経営が順調に進み就中余市は栽培面積も多く名声を博しておつたのである。ところが明治三十七年札幌で農産物共進会が開催された折に、滝川のりんごが非常に名声を博したことを洋行中に聞き、帰朝後四十一年に大きな期待をもつて滝川町に視察に行つたところ殆ど腐絞病の被害で枯死し、残存せるりんご樹は僅少で甚だしく期待に反したものであつた、この頃江部乙の状況などと併せ考え、りんごの生育が岩見沢以北では寒さの限度を越えるのではないかと考えたのであつた。

りんご（旭）の結果状況

○北海道りんごの前途と市場性

しかるに昨秋はさらに北部に位する音江村の出品果が輝く農林大臣賞をかち得たことを思い、事実現在の音江りんごの盛況を見る時栽培に対する研究と努力によつて北海道におけるりんご栽培も相当北進し、優秀な果実が生産されることを実証せるもので今後の北海道りんごの発展はまことに明るく前途洋々たるものを覚えるのである。

しかし音江においても江部乙村においても、前代の方々の燃えるがごとき研究と努力が今日をなしたものであり、現在りんご栽培地において成果をあげておらぬ地帯は一般に努力の足りぬところが多く誠に遺憾であり、先代に劣らぬ奮起が望ましい。

北海道りんごは一般に青森りんごに劣るように考えられているが、品種によつては劣るものもあるが旭、紅玉、デリシャスなどは遙かに優秀な品質をもつており、勝るとも劣ることはない。

旭の鮮かな濃紅の着色と風味は北海道でなければ特性を発揮せぬところで遙かに優れている。

紅玉についても秋の収穫時は青森りんごが気候の関係上発育良く、風味もよいが一旦貯蔵して二月以降になると、青森産の紅玉は水ぶくれするのに反し北海道産紅玉が断然風味、品質ともにすぐれ、貯蔵力の優

れた点は大きな長所といえよう。

デリシャスもまた紅玉同様に、青森りんごはすぐボケやすいが北海道産のデリシャスはボケることなく、風味濃厚で一月以降のデリシャスは北海道りんごが優秀であることは識者の認めるところである。その他緋ノ衣にして然り、品種によつては以上のように、北海道りんごの優れているものが多いが特に府県各市場においても有望なる品種として上記三品種はまことに前途洋々たるもので、今後府県市場に対する出荷時期を考慮し優秀な北海道りんごを供給するならば声価は一段と発揚され大きな需要を見るものと考える。

北海道にはまだりんご適地は多いが特に石狩川沿岸の当別より雨龍、納内、神居古潭に至る沿岸丘陵地などは旭、紅玉などの誠にすぐれた適地と考える。その他簾舞、白川など各地に好適地が存在している。

現在北海道においてはりんごの栽培面積少く、従つて生産量も少いために毎年大量の青森りんごが入荷している状態にあるが、前述のように誠に北海道りんごは将来性に富み、前途洋々たるものであれば、品種の選択に注意し栽培の進展されることを念願としている。

旭の來歴

りんご旭はカナダのオンタリオ州の原産で紅綏系統に属し一説に紅綏の実生ともいわれている。

本種はマッキントシ氏がいまから約八十五年前一八七〇年ごろ発見し増殖したもので原名は同氏の名前をとりマッキントシ・レッド Mc Intosh Red と命名されている。

日本には明治二十三年カナダのギップ氏が北海道大学の前身である札幌農学校に輸入したのが最初のものである。

ギップ氏は熱心な果樹栽培家で果樹の調査のため全世界を二度も廻つて視察している。明治二十二年の夏同氏が北海道における果樹栽培の視察に参られた。その節、故南博士が耐寒性の強い果樹を送つてもらいたいと依頼したところ心よく承諾され翌二十三年二月耐寒性のりんごと葡萄を届けられた。その時旭が入つたのが日本に輸入された最初のもので北海道大学の果樹園に栽植された。その時りんごは十三種で旭のほかに花嫁、黄魁、ファメウス・サックレー、緑星、ホイットニー、クラブ系五種その地入つておつた。

ただギップ氏は日本よりの帰途エジプトに立寄り、同地で悪疫にかかられ逝去され誠に惜しいことをしたのである。それで依頼した苗木は望めぬものと思つておつたのが二月到着し驚きとともに同氏のビジネスライクに敬服し賞讃したのであつた。

この送られたマッキントシ種が試作の結果が非常に良好だつたので、明治二十九年十一月山形県において開催された第四回苹果名称一定会で命名され宣伝普及したのである。当時米国にても本種はいまだあまり普及されておらなかつた時代である。

旭種は現在北海道においては重要な品種で栽培面積も多いが、最近生産者は出荷を急ぐ傾向が強く、特有の風味が出ぬ九月中に大部分収穫するので一般消費者大衆は旭は酸味の多いりんごくらいに考え美味しい適食期には市場に少く、旭のおいしい味を一般に知らぬ実情は誠に遺憾である。収穫時期並びに販売に留意してほしいものである。

旭の果肉は絹ごしの如く、貯蔵して軟くなつても特有の品質をもつている。兼て余市町の高山さんの先代は、旭は貯蔵に耐え、よき風味を持続するりんごであることを主唱されたものである。

紅玉の來歴

本種は明治五年開拓使が輸入したりんごでこれが増植され本道に入つた。

北海道では今日なお六号という愛称で呼ばれているが、これは開拓使が輸入当時苗木に番号を附し品種名並びに解説が別便で目録として送付されたのである。当時英語を読める者少く、ために北海道に配布されたりんご苗木にも輸入番号を附して配布され、紅玉は実際の輸入番号は二一号であつたが、配布の番号がどこで違つたのか六号であつたためかく呼称されたのである。輸入番号と配布番号とは一号の赤龍、八号の翠玉など二、三のものは合致しているが、国光の場合輸入番号は三四号であるが配布番号は四九号というように異なつている。北海道の番号呼びはその配布番号から由来するもののようである。

なお本種はしばらく原名不詳であつた。これは米国のりんご品種の分類記載に全面赤く着色するものと、縞に着色するものに大別されてあつたが、紅玉は縞に着色する方に入つておつたためにしばらく疑問にされたエピソードもある。本種は北海道では六号、青森方面では満紅と呼ばれて優良品種として早くより認められ、増植されたのである。明治二十七年五月山形県で開催されたりんご名称一定会で満紅と命名されたのであるが、明治三十三年五月盛岡で訂正命名され今日に至つている。

本種は米国紐育州において「エソパス」種の実生として生じたものと称されている。

原名はジョナサン Jonathan である。豊産であり、風味品質、また色沢優秀でよく各地で生育結実するので本種は世界のりんご栽培地帯各地に栽培される品種である。

（しらはた記）

牧草と園藝（四月號）目次

◇表紙写真……上野幌育種場に咲き誇つたつるばら
◆将来性ある北海道リンゴと旭紅玉の来歴……星野博士談……一
◆二・三毛作をねらつた私の蔬菜栽培について……加藤幸作……三
◆チモシー雪印改良一号の解説……上野幌育種場……六
◆牛のための献立表……上野幌育種場……七
◆ルーサンの品種……中野富雄……九
◆M・Hによるフックグラスの駆除……中野……一〇
◆クリムソンクロバーのサンマーサイレージ……安孫子……一〇
◆草花二つ三つ……原秀雄……一一
◆「ばら」の露地栽培……一三
◇四季咲高級ばらの案内……一四